

平成29年度 自己点検・自己評価(結果)

学校番号	24	学校法人静岡理工科大学 静岡北高等学校	記載者	廣住雅人
------	----	---------------------	-----	------

学校教育目標	1. 常に誠実で、清らかな心をもって物事に真剣に取り組むことができる人材を育成する。2. 現状に甘んじることなく、日々新しいものを創り出そうとする気持ちを持ち、何事にも積極的に挑戦していく人材を育成する。3. 技術の進歩が著しい今日、大学院・大学・専門学校という高等教育機関の場において、高度な科学技術を習得できるように、基本的な学習を身に付ける。	【総合評価】 重点目標4項目のうち3項目は施策・成果ともに実現できた。目標生徒獲得数には届かなかったが、施策に対しては、全教職員が積極的に取り組んだと判断される。数年後に控えた新学習指導要領実施、大学新テストに対する教員の研修活動や生徒への試行も積極的に行われたと判断できる。次年度への取り組みが、PDCAのC(チェック)に当たるので、この点を踏まえた上での平成30年度達成目標を再構築する。		
教育方針	将来、科学技術に夢と希望を持ち、創造性豊かな人材育成の基礎をつくる。			
今年度の重点目標		評価	成果と課題	次年度の取組
時代が求める教育を展開する	①-1. 国際的な研究発表の機会を数多く計画することや、海外連携校の拡大、留学制度の再構築し、海外交流プログラムを開発する。 -2. ICTを正しく使うための「モラル」や「リテラシー」教育を展開する。 ②-1. 「学力の3要素(①知識・技能の確実な習得 ②思考力・判断力・表現力 ③主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度)」を育成するためのカリキュラム・マネジメントを推進する。 ④-1. 主体的・対話的教育手法を実践し、探究学習・課題研究においては、事前学習・事後学習・成果発表などの活動を展開する。	4	①-1. グローバル教育展開のために、海外校交流に積極的に参加させた。今年度はタイの提携校受入れと訪問に、高・大一貫コースの生徒を中心に成果を得た。 ②-1. 教員用・生徒貸出用タブレットの数を増やし、多くの教員・生徒がICT機器に触れ、効果的な学習の機会を増やした。また、移動用スクリーン・プロジェクターを増やし、より簡単にICT機器の授業展開のために環境を整えた。 -2. HR活動や集会時に、「モラル」や「リテラシー」教育を行った。単に使用制限を加えるのではなく、現代社会で必要なモバイル機器を、上手に使いこなす教育が本校の主流になっている。狙いは、溢れる情報の中で、必要な情報と不必要な情報を選択できる能力の育成である。 ③-1. グローバル教育を展開するにあたって必要な英語4技能の検討と、大学入試改革対応のために検定の検討や、講演会等に積極的に職員を派遣し情報の共有化を図った。 ④-1. 外部講師研修会を実施し、主体的・対話的教育手法の指導を受けた。	①-1. 平成29年度中に計5名が長期留学を行い、平成29年度卒業生の中から5名が海外大学へ留学した。生徒が主体的に海外留学を経験しようとする効果が徐々に現れてきている。 ②-1. 平成29年度末に「タブレット端末」を導入することができ、今後はいかに効果的に活用した授業展開をしていくかについて研究することが必要である。 -2. 発達段階にある生徒に対して、ネット依存度の危険性と、「モラル」や「リテラシー」について教育を継続することが必要である。その上で、より効果的なICT教育を追求していきたい。 ③-1. 平成29年度の検討内容や共有された情報を基に、継続的に推進しながら大学入試改革への対応を検討する。 ④-1. 平成28年度から研究を始めたティープ・アクティブラーニングに関する研修と研究授業を継続して行い、より深い学びを個々の生徒に行わせる教育プログラムを構築する。
法人内学校との連携強化を図る	①-1. 大学及び専門学校の特色・魅力・特典を発信し、各学年毎、大学・専門学校へ誘導する。 -2. 大学と連携し高・大一貫教育の再構築を推進しつつ、教育内容や実践成果を学校内外に発信する。 -3. 生徒の進路希望と適性を見極め、高・大一貫コース及びコース以外からの志願数を増やす。 -4. 専門学校と連携し高・専一貫教育の再構築を推進しつつ、教育内容や実践成果を学校内外に発信する。 ②-1. 基礎学力育成を目的とした学習プログラムを構築する。	4	①-1. 「一貫教育」に関する教員の研修機会を増やし、大学・専門学校の魅力を理解させ、誘導に役立たせた。 -2. 「一貫教育」を強かにアピールし、大学・専門学校の魅力を具体的に体感させ、志願者を増加させる体制を整えた。 -3. 47名(一貫コース以外で20名)が静岡理工科大学に進学した。 -4. タブル・スクールの優位性について、生徒・保護者対象に説明を行った。 ②-1. 静岡理工科大学に進学する生徒に対し、不得意科目に対して放課後の補習等、できる限りの補習を行った。	①-1. 一貫教育の魅力を伝え、希望者数を増やす指導を継続する。 -2. 静岡理工科大学に関する理解を深める取り組みを継続する。 -3. 高・大一貫コース、コース以外からの志願数を誘導する。 -4. 教員の高・専一貫コースに関する理解を深める取り組みを継続する。 ②-1. 基礎学力の定着を図りつつ、大学入試改革で能力を発揮できるような学力の三要素をしっかりと身に着けた生徒の育成を継続する。
評価される進路実績作りを行う	①-1. 質の高い、授業・講座を実施し、教科を中心に「学び方」を学び、「生きた高質な知識・思考力を養う授業」を展開する。 -2. 主要5教科において、「高等学校基礎学力テスト(仮称)」、「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」の研究を行う。 -3. 2020入試に対応できる教科指導力を教員研修によって養う。 ②-1. 実用的な「読む・書く・聞く・話す」の4技能などやネイティブ・スピーカーによる「英語で英語を学ぶ」という本格的な英語教育を導入し、「英語力」を育成する。	4	①-1. 質の高い授業を実施するよう努めた。 -2. プリ試験を受験させ(2・3年生理科)データの収集と分析を行った。静岡大学の新テスト研究事業へ、生徒・教員を派遣した。 -3. 大学入試改革がどのように展開していくかの情報を集め、求められる教育の在り方について考えた。 ②-1. 大学入試を視野に入れながらALTを積極的に導入し英語教育を実践した。	①-1. バランスの良い能力を持った生徒を育成していくために、ティープ・アクティブラーニングを導入した授業を展開する。 -2. 大学入試改革の動向を見ながら、新たな入試制度に対応できる資質をより高くすることを考え、研究・分析・対策を進める。 -3. 積極的に外部への研修・講演会へ参加し、大学入試改革に関する情報を集め、どのような資質が必要かについて十分に検討し、そのための教育プログラムを考える。 ②-1. 生徒が更に主体的に取り組める授業になるよう検討・改善を進める。
目標生徒数を獲得する	①-1. 学校案内パンフレット等々の広報媒体を検証・改善すると共に、デジタル化し、紙媒体では伝えきれない情報発信の開発を行う。 ②-1. 教職員全員が学校の正確な情報を伝達できるよう(情報の共有化、プレゼンテーション能力の習得)にする。	3	目標生徒数の獲得はできなかった。 ①-1. 広報媒体の検証・改善を進めた。説明会においても普通科の魅力がわかりやすくなりました。 ②-1. 生徒が主体的に活動する説明会とし、中学生・保護者に高い評価を得た。	①-1. 早急に平成29・30年度入試の分析をし、求められる学校像を再構築する。 ②-1. 生徒の詳細な情報を共有し、ワン・バイ・ワン(1対1)で中学生や保護者との距離感を近いものとし、志願者の増加に努める。

領域	ねらい	評価項目	達成目標	昨年度の実績	評価	成果と課題	次年度の取組
学校経営	設定された教育目標にそい学校経営計画書が作成され、それに基づいた教育活動を展開する。	教育目標、学校経営計画書、教育活動	平成29年度から5年間の第3次中期計画に基づいた学校経営を行う。	各分掌官の連携をとりながら、高校教育改革・大学教育改革を見据えるために、外部で行われる研修に積極的な参加した。	4	第3次中期計画初年度に従い、教育目標、学校経営計画書が作成され、それに基づいた教育活動は概ね成果が得られた。	学校をとりまく環境が大きく変化の中で、第3次中期計画の学校経営への落とし込みと刷新を行う。
教育課程・学習指導	適切な教育課程が編成され、学習目標・計画が明示され、日常の学習活動を効果的に展開する。	教育課程、学習目標・計画、指導、課題実施、学習状況把握	新学習指導要領に基づいた新教育課程の編成をにらみながら、中高の接続や学科再編等の検討を考える。また、個々の教員のスキルアップをしていくことで、どの教員も個々の生徒の学習レベルに適した授業展開を行う教育環境を整える。	新学習指導要領に基づいた新教育課程の編成をにらみながら、中高の接続や学科再編等の検討を考えるために5か年計画を立てた。また、個々の教員のスキルアップをしていくことで、どの教員も個々の生徒の学習レベルに適した授業展開を行う教育環境を整えることを推進した。	3	達成目標の点からは、新学習指導要領に基づいた新教育課程の編成検討、中高の接続や学科再編等の検討までには到らなかった。しかし、個々の教員のスキルアップのための研修や、生徒の学習レベルに適した授業展開を行うことはできた。	近づく新学習指導要領への移行に対して、静岡北高校の将来あるべき姿を再検討・再検証を行い、見合った教育課程編制と学科見直し検討を進める。
生徒指導	健全な高校生活を送れるような生徒への啓発活動を行い、個々の生徒へのサポート体制を家庭との協力のもと確立し、生徒理解に努める。また自立した生徒の育成のための支援をする。	生徒への啓発活動、家庭との連携、事前・事後指導体制、人間教育、生徒理解、基本的な生活習慣の確立、自立した生徒の諸活動	問題行動を起こさないといった気持ちを持つてる生徒を育成する。また、一層複雑になる社会環境の中で、心の病を抱える生徒たちに対しては、個々の生徒に応じた適切な指導体制を整える。加えて、社会に出る心構えとして、改めて基本的な生活習慣を確立させる。	問題行動を起こさないといった気持ちを持つてる生徒を育成している。多くの生徒が言動面で落ち着いた学校生活を送っている。また、一層複雑になる社会環境の中で、心の病を抱える生徒たちに対しては、個々の生徒に応じた適切な指導が行われた。	4	生徒の問題行動は少なく、生徒が落ち着いた学校生活を送れるような指導が行われた。近年、顕著に見られることは、生徒会の活発な活動である。	多様化する生徒に対応できる学校体制・教員体制を構築するために、外部関係機関との連携を密に行う。
進路指導	学校の方針に基づいた進路指導を展開し、個々の生徒の進路希望に即した緻密な指導を実行する。また、本校独自のキュリア教育を実施する。	学校の方針に基づく進路指導、生徒への情報提供、個々の生徒への対応、就職指導、進学指導、キャリアパートナーシップ事業	高校卒業後のさまざまな進路選択があると同時に、その後も「単線型キャリア」、「複線型キャリア」等、生徒の将来は多種・多様である。それに対する基本的指導を教員の共通理解のもと行う。	高校卒業後のさまざまな進路選択があると同時に、その後も「単線型キャリア」、「複線型キャリア」等、生徒の将来は多種・多様である。それに対する基本的指導を教員の共通理解のもとに行うことができた。	4	進学指導結果となる進学実績では、初の国公立大学医学部医学科の合格・進学を含み、国公立大学合格目標数(50)は達成することができた。また、法人内の大学・専門学校への進学者目標数も達成することができた。	学校の方針に基づいた進路指導の展開は行われているので、多様化する生徒＝進路に対する研究・研修を行う。
安全管理	日常から防災に対する意識を高め、予期せぬ災害時に適切な対応ができる体制作りをすることが必要。また、学校としても校内の危険個所の定期的な点検、スクールバスの安全運行といった意識を常に持ち合わせる必要がある。	防災訓練(校内・校外)、災害時の対応、安全な教育環境、安全なスクールバスの運行	防災意識の継続的啓発活動の実施と安全管理に関しては、現状以上に意識を高めた。加えて、教員の危機管理に対する意識をさらに強める。	防災意識の継続的啓発活動の実施と安全管理に関しては、現状以上に意識を高めた。加えて、教員の危機管理に対する意識をさらに強めた。	3	安全管理計画である防災訓練、災害時の対応策等は実施されたが、教職員からは、「災害想定を行い、適切な対応ができる安全管理に向けての精度を高めた計画が必要である。」と発展的な意見が出された。	いつ発生するか不明である災害に対しての安全管理マニュアルの確認と、マニュアルに従った実動性のある体制、対応を整備する。
保健管理	生徒の健康管理のための検診計画を作成・実行し、疾病者に対する治療勧告を確実に実行。また部活動の活性化を図り、ボランティア活動に積極的に取り組む。	検診計画、健康管理指導、運動部・文化部の活性化、ボランティア活動への参加	治療勧告が出た生徒は、確実に直させる指導を徹底する。また、運動部・文化部共に今年度以上の成果が残せるような活発な活動を展開する。	今年度は、養護教諭を中心とし、保健体育課の顕著な活動が見られた。治療勧告が出た生徒は、確実に直させる指導を徹底できた。法的措置に従った保健活動・安全活動が実施された。	4	昨年度に続き、養護教諭を中心とし、保健体育課の顕著な活動が見られた。法的措置に対する対応も高まり、生徒の健康管理に対する保健活動・安全活動が実施された。	生徒が主体的に健康・保健管理ができる体制を整えるために、専門機関との連携を深め、情報伝達するような機会を設定する。
特色ある教育	法人のスケールメリットをいかし、本校独自の高・大、高・専一貫教育を推進し学園全体の活性化を図る。また、課題研究を推進し他校との差別化を図りつつ、進路実績につなげる。	高・大・専一貫教育、高・専一貫教育、外部機関との連携教育、SSH事業への取り組み、課題研究	高・大・専一貫教育に関しては、ワーキンググループの答申を受けプランを推進するため法人・大学・高校の経営サイドの協力を得ながらプログラムの充実を図る。高・専一貫教育に関しては、高校・専門学校の教員の意識にずれが生じないよう、より連携を密にしながら思い切った改革を検討する。また課題研究については、連携機関を海外に求め幅を広げ、さらにはより生徒主体の取り組みに移行していく体制を構築する。	高・大・専一貫教育に関しては、ワーキンググループの答申を受けプランを推進するため法人・大学・高校の経営サイドの協力を得ながらプログラムの充実を図れた。高・専一貫教育に関しては、高校・専門学校の教員の意識にずれが生じないよう、より連携を密にすることができた。	4	法人内の大学・専門学校進学を中心とする高・大・専一貫コース、高・専一貫コースにおいては、実施する双方間意識のずれが生じないよう、連携を密に取ることができ、教育内容が年々ブラッシュアップしていることが窺える。	学校法人静岡理工科大学のスケールメリットが、より実動するようになり、法人、大学、専門学校との連携や情報交換ができる機会を多く持つ。

領域	ねらい	評価項目	達成目標	昨年度の実績	評価	成果と課題	次年度の取組
組織運営	組織的な業務分掌体制を整え、規律をもって教職員がサービスを全うしする。また計画的な予算編成を中長期的な観点から考え、日常の経理業務を正しく管理する。加えて個人情報に関する管理、公文書管理を適切に行なう。さらに保護者・地域と連携した活動を展開する。	効果的な学校運営体制の確立、組織的な業務分掌体制、規律正しい勤務体制、連携した危機管理体制、計画的な予算執行、中長期計画の策定及び遂行、経理業務の管理、個人情報保護、公文書の管理、情報収集体制の確立等、効果的な活用がされているかチェック機能の確認をする。	現在、総務部・教務部・指導部の3部に各分掌が配置されているが、学校業務が多くなり各部・各分掌の業務が煩雑になっているので、組織と業務内容の精査を行う。	組織をスリム化すること円滑な組織運営ができなかった。報告・連絡・相談をしていくことで、情報の共有化は進んでいく。経理業務に関しては、中小期計画も時流で変化している中で、それに伴って予算計画も変更していくことができなかった。コンプライアンスが求められる時代の中の学校として、情報の管理意識、教職員の規範意識について、啓発活動することができた。	3	学校全体が大企業(病)化しているような感じがある。それでも組織としては機能しているが、達成目標としている組織と業務内容の精査を行う必要性が迫っている。規律をもって教職員がサービスを全うすることや、日常の経理業務を正しく管理する、加えて個人情報に関する管理、公文書管理を適切に行なうなどは、管理職によって指導がなされた。	教員の働き方改革を考察し、「働くことへの考え方」「働き方」について研修する機会を設け、そこから派生する諸問題について、できる解決策は実践し、残された課題についての解決策を洗い出す。
研修	学校の教育内容が問われる時代、教職員の資質向上が常に求められるので、計画的かつ時代が求める教師となっていくための研修を的確に実施し、各教職員が個々のスキルを上げていく体制作りをする。また、研修内容を共有化していくためのシステム作りをしていく。	計画的な研修体制の確立、郊外研修への参加、研修報告会の実施	研修の有益性を生かし、教育を行う教職員の資質向上と、現状掌握とその共有化のための校内研修・中高合同研修を的確に実施する。	時代をとらえた研修内容を精選して実行できた。さらに研修報告会を実施すると共に、次に何をしたらよいのかを考える話し合いを実施することができた。	4	教育、学校現場の主流である「高大接続(大学新入試)」「ICT教育」「アクティブラーニング」に関する研修への積極的な参加を行い、全教員へのフィードバックも行われた。授業改善に結びつく「アクティブラーニング」については、外部講師(アドバイザー)による校内研修・研究授業が行われ、全教員の共通理解が図られた。	能動的であったり、受動的であったりする研修を繰り返し行い、教員一人一人が研修を企画できるスキルを身につける。
保護者、地域と連携	学校を支えてくれる保護者の会や外部団体との連携を強化し、学校運営を側面から支援してくれる組織の意見を受け入れながら、更なる本校の発展を目指す。	保護者の会との情報交換、学校運営に対する外部団体の参画、外部要望の学校運営に対する反映、保護者に対する協力依頼	学校を支えてくれる3団体(保護者の会、同窓会、教育振興会)との連携をさらに強化していく。特に地域や外部団体との連携を強化していく。	保護者の会との定例会がルーチンで終わることなく、積極的な意見交換の場として発展させることができた。また、新たな支援団体の協力を得てキャリアパートナーシップを展開できた。地域住民が本校に足を向けたくなるようなイベントをSSH事業を中心に展開することができた。そのための広報媒体としてホームページを積極的に活用した。	4	学校を支えてくれる保護者の会との関係は良好であったと判断される。同窓会、教育振興会からの協力も十分得られたと判断する。地域住民との連携では、一部の生徒の活動・活躍になるので、今後は多くの生徒が地域との連携に係わる計画を進めたい。	保護者の会、同窓会、教育振興会と一体感が醸成できるような取り組みを企画する。または現存する企画については、よりブラッシュアップを行い、内から外から応援してもらえるような体制を作り上げる。
施設設備	施設設備の美化と定期的な点検を確実にし、安全管理に努め、生徒たちにとっての学習環境を整備する。	効果的な施設利用と環境美化、施設・設備の点検、学習環境の整備、図書館の活用	大規模事業計画である中学棟・親和館(特別棟)に替わる複合施設と体育館の建設に向けた計画を検討する。また、高校棟内の施設・設備の整備を推進する。	小教室の使い方の指導と清掃を確実に行った。修理依頼に関しては、文書で行うことを徹底できた。また、生徒会の美化委員会を通して美化意識の啓発活動を実施した。図書館に関しては、放課後の利用も考え照明を明るくする施設改善を実施することができなかった。	3	大規模事業計画である中学棟・親和館(特別棟)に替わる複合施設と体育館の建設に向けた検討はできなかった。また、高校棟内の施設・設備の整備を推進する。	新規施設の検討も視野に入れながら、現存する施設の有効活用するための、定期的点検と美化について、全教職員で実施できる計画を立て、共通理解の下実施する。
				総合評価	4		